

5 佐大附特版「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントの整理を行う。



〔図31 佐大附特版「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイント図〕

本研究の目的である「現在及び将来の生活に関心を向け、自ら考え、自分らしくよりよく生きていこうとする『生活を切り拓く児童生徒』を育むために、適切な実態把握と目標設定－授業実践－評価のサイクルの中で、児童生徒の多様な『思考力、判断力、表現力』を十分に引き出し、一人一人が主役となる授業作りの在り方を探る。」について、1、2年目に実施した授業研究や検討を通して、単元の設定段階で考えておかなければならないことや、目標設定や評価の段階で考えておかなければならないこと、授業内外での教師の指導・支援において大切にすべきこと等を明らかにすることができた。授業作りの行程を山登りに見立てて、それらを「授業作りのポイント」としてまとめて図式化した（図31）。

ここに挙げたポイント1つ1つはどれも重要な項目であるが、1授業や1単元ですべて網羅すべきこととは捉えず、その授業や単元でねらっている【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】や指導目標等を踏まえて関連づけながら選択されるものであると考える。また、道順に沿った授業作りが基本となるが、各項目は関連し合っているので、実際の授業作りにおいては行ったり来たりしながら進めていくことになると思われる。いずれにせよ、教師はここに挙げたポイントを常に念頭において効果的なポイントを選択することが重要であると考えた。道筋に沿って、それぞれのポイントについての説明を記載する。

●「伸ばしたい『思考力、判断力、表現力』」

教師は、児童生徒の将来像を描き、現在の生活も含めて児童生徒の一人一人の生活が豊かなものとなるように、児童生徒の【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】について意識しておくことが授業作りにおける出発点になると考えた。各教科等を合わせた指導はもちろんだが、指導目標や指導内容から授業作りを始める教科別の指導においても、「生活を切り拓く力」としての【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】との関連を意図した上で単元計画をスタートすることが大切である。ポイント図では、教師が最初から意識しておくべきこと（もっておくべきこと）としてリュックの絵で示した。

●「児童生徒の内面を捉える実態把握」

児童生徒の将来像を描き【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を想定するにあたって、児童生徒が意欲的に取り組める授業の活動内容を設定するにあたって、まずは実態把握が必要となる。児童生徒の様々な実態のうち、本研究では心の動きや思考などの「内面」に着目した。その内面の1つである児童生徒の興味・関心については、教師は把握しているつもりになってしまうのではなく、その都度丁寧に把握することが大切であると考えた。次に、特性や認知の発達段階も含めた児童生徒の物事の捉え方や受け止め方を適切に把握することも大切であると考えた。児童生徒が見通しをもって主体的に活動に取り組むためには、活動の内容や取り組み方の提示が、児童生徒にとって受け止めやすいものでなくてはならない。また、児童生徒の発信を適切に見取るためにも、児童生徒の物事の捉え方を把握しておくことは重要である。上記のような児童生徒の内面は、「教師が見てすぐ分かる」ものではない。一人一人の様子や行動から、背景にあるものを考え児童生徒の内面を予想しながら理解を進めていく必要がある。複数の教師で多角的な視点をもって検討する事も大切である。

●「ねらいを明確にする目標設定」

「生活を切り拓く力」としての【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の育成を目的として、その目的が達成されるように、単元において「何を教えるか」や「どんな目標の達成を目指すのか」は、各教科の内容と目標が取り扱われるものである。単元計画の目標設定の際は育成を目指す資質・能力の3つの柱に沿った明確な目標設定が必要であることが、ここまでの取組において検討された。特に「思考力、判断力、表現力等」については、具体的に児童生徒がどのように思考したり判断したり表現したりすることを目指すのか、評価基準と合わせて教師間で検討しておく必要がある。チームティーチングにおいて授業内の働きかけに一貫性をもたせるためにも、共通理解を図っておくことが大切であると考えた。

●「児童生徒の内面を見取る評価規準の設定」

目標設定と合わせて「児童生徒のどのような姿をもってその目標が達成されたと捉えるか」の評価規準を設定しておくことも重要である。目標設定と評価規準を事前に教師が話し合っ設定することによって、その姿を引き出すための具体的な指導・支援についても話し合うこととなり、授業内での効果的な支援や言葉かけ等につながると考える。また、目標設定と評価規準を合わせて検討する中で、設定した規準は1つであっても、その目標を他の行動から見取ることができる場合などについても事前に出し合うことができ、より適切な評価につながると考えられた。

●「単元展開（単元計画）の工夫」

授業において児童生徒が主体的に活動に取り組むためには、見通しがもてることが大切であるが、1授業だけではなく単元全体の見通しをもつことも重要であると考えた。これまでの取組から、児童生徒が単元の見通しをもつのに、「繰り返し」と「発展」を取り入れることが有効であることが分かった。初めて取り組む1回目の活動を経ることで自信をもって2回目以降の活動に取り組む姿、1回目よりも2回目、3回目にさらに工夫を凝らしながら取り組む姿を確認することができた。教師にとっては、1回目の児童生徒の姿を踏まえて、一人一人に必要な指導・支援を練り上げながら2回目・3回目の授業を展開することにもつながった。

児童生徒にとってイメージしやすい「単元全体のめあて」を設定し、そのめあてに向かう学習活動の流れがあると、より児童生徒が意欲的に取り組もうとする様子が見られた。本時の活動が次時の授業に生かされるようにしていくことや、本時と次時のつながりが必然となるようにすること、また、授業間のつながりを児童生徒が捉えやすくなるように視覚化を含めた提示の仕方を工夫することが必要であることが明らかになった。

●「活動内容の工夫」

前述したポイントの1つ「児童生徒の内面を捉える実態把握」において、興味・関心を把握する重要性を挙げたが、把握した興味・関心は、この活動内容に生かされるものであると考えた。興味・関心のある活動には児童生徒は主体的に取り組むが、それは活動への取り組み方のみならず、試行錯誤したり創意工夫したりするなど、活発な思考や主体的な判断、自信に裏付けられた表現を引き出すこととなると考えた。

また、興味・関心に基づく活動においては、簡単にはクリアできず、じっくり考えたり繰り返し挑戦したりしなければならないような学習活動であっても、粘り強く取り組むことができる。粘り強く取り組み続ける中で、児童生徒が本来もっている「思考力、判断力、表現力」が十分に引き出され、さらに伸ばしていくことができると考えた。そして、そのような場面は教師が意図的に設定する必要がある。

じっくり考える活動の設定とともに、自分で選択する・判断する活動を設定することも重要である。「児童生徒が混乱することを避けたい」「児童生徒自身が困るような結果になる選択を避けさせたい」という教師の過度の心配や配慮から、自己選択・自己決定する学習活動をこれまでに十分に組んでいなかったのではないかとという反省が挙げられた。児童生徒の「思考力、判断力、表現力」を育成するにあたって、因果関係の理解が求められるが、第一歩として「自分で決める」場面を設定し、その結果を受け止める学習が必要である。その時には失敗を経験することになっても、そこからの立ち直りと最終的な達成を指導の中にきちんと仕組み、成功体験を積み上げることによって、「生活を切り拓く力」としての「思考力、判断力、表現力」の育成につながるのではないかと考えた。

さらに、活動内容を設定するにあたっては、他者との適切な関わりも重視していきたい。これまでの取組において、教師や友達に思いを伝えたいというモチベーションから積極的に表現しようとしたり、友達の考えに触れて自分の考えを広げたり深めたりする姿を見ることができた。まずは児童生徒が自分の思いを膨らませたり明確にしたりする指導・支援を充実させた上で、他者との関わり場面も効果的に設定していきたいと考えた。

●「授業展開の工夫」

単元全体における展開と同様に、1つの授業内の展開も整理されなければならない。整理する視点の1つは、児童生徒が授業の見通しをもち主体的に取り組めるような授業展開とすることである。ここでも「繰り返し」や「発展」を取り入れたり、視覚支援を行ったりするなどの工夫が考えられる。もう1つの視点は、主体的に活動に取り組む中で、児童生徒が自分で考えて行動した結果が、課題の達成となるような授業展開とすることである。「活動内容の工夫」のポイントとも関連するが、「活動内容」「制作するもの」「活動の進め方」「作り方」などを、児童生徒主体で選択したり決定したりして取り組むことともつながると考える。教師の事前計画や準備が難しくなるという問題点もあるが、大切な視点として押さえておきたい。

「授業展開の工夫」では「めあてをどのように設定するか」「有効な振り返りを行うには」ということも大切な視点となる。本ポイント図では、それぞれ別ポイントとして起こすこととした。

●「自分事としてのめあての設定」

児童生徒が主体的に学習活動に取り組むには、興味・関心のある活動であることや活動の見通しがあることなどが大切であることなどをここまで確認してきた。同様に、児童生徒が活動に「○○のために○○する」という目的意識をもつことができるようにすることも重要であることが明らかになった。さらに、本校の児童生徒は人との関わりの中で他者を大切に思う気

持ちが育ってきており、目的意識の1つとして「〇〇さんのために」という他者意識をもたせると、より一層活動に積極的に取り組む姿を見ることができた。そのような活動においては、「相手に伝わるように分かりやすくしよう」「相手が喜ぶようにもっと丁寧に作ろう」などと思考を巡らせ試行錯誤し、表現を工夫する姿を確認することができた。

●「活動時間の保障」

前述の「授業展開の工夫」とも関連するが、児童生徒が興味・関心に基づいた活動にじっくり取り組むことができるようにするためには、活動時間や活動量を十分に確保していかなければならない。じっくり取り組む時間は、児童生徒がパッと思い付いたアイデアやぼんやりしたイメージを、具体的な計画や明確で広がりのあるイメージにしていく時間であり、教師や友達とやりとりしながらよりよい考えを導き出す時間であると考えた。

また、身体活動や遊びを取り入れた活動や芸術活動においては、活動そのものの感覚を味わいながら、そのよさを内面に取り込む時間である。周囲の物事や人に関心を向け、興味・関心を深めたり広げたりするなど【「思考力、判断力、表現力」の育成を支える土台となる力】を醸成する時間となる。

しかし、単純に活動量や作業量を増やし時間を伸ばすことが有効だとは限らない。児童生徒は「単純に作業しているのか」、それとも「思考したり判断したりしながら活動しているのか」、教師はリアルタイムで児童生徒の行動や表情やつぶやきなどから判断し、適切に指導・支援していく必要があると考える。

●「教材・教具の工夫」

十分に確保された活動時間において、児童生徒が思考を巡らせながら課題解決に向けて取り組む姿を引き出すには、一人一人に応じた指導・支援を行っていかなければならないが、その1つが「教材・教具の工夫」である。「興味・関心を引くこと」、「すべきことや考えるべきことが焦点化されて、不必要な情報が少なく分かりやすいこと」「児童生徒が自分の思いを反映させて操作し、自分の目で見て確認できること」、「途中経過を教師も把握できること」、「考え方の視点や順序が示されたワークシート等を準備するにすること」、「後で自分が考えたことを振り返ることができること」などが「思考力、判断力、表現力」を引き出す教材・教具の工夫点として考えられる。

●「コミュニケーション支援」

自分の思いを伝えたり相手の思いを受け止めたりする「コミュニケーションに関する力」は【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】でも中心的なものである。児童生徒が自分らしく生きていくために必要不可欠なコミュニケーションの力を育んでいくことは、学校教育における重大な使命の1つである。まずは、「コミュニケーションをとりたい」というコミュニケーションマインドを育むことが大切である。マインドの育成には、現時点で児童生徒が獲得しているコミュニケーションスキルでも、伝えたいことが相手に伝わる経験を積むことが必要である。そのためには、教師は児童生徒の様々な発信に気付き、背景にある伝えたいことを適切に読み取ることが大切になると考える。コミュニケーションスキルの獲得や広がりを指導・支援して

いくと同時に、児童生徒にとって「伝えることができる対象が広がる」「より自分の伝えたいことが適切に伝わる」ようなコミュニケーション支援にも努めたい。児童生徒のQOLの向上につながるという視点で進められなければならないと考える。

●「言葉の広がり」の支援」

「言葉」はコミュニケーション手段の1つとして習得を目指さなければならないが、児童生徒の思考を助けるという側面でも重視していきたい。イラストや具体物等も含めて「言葉」は、児童生徒が捉えた事象の表象機能を果たし、「言葉」を使用することによって捉えた事象を想起することができる。認識して想起できるということは、「○○について思い付くことができる」「○○について考えることができる」ということであり、「言葉」と「思考や判断」は切り離すことができないものだと考える。

特に、「気持ち」は目に見えないものであるが、それを「言葉」によって表出できるようになることは、自分の気持ちを整理することになり、情緒の安定にもつながるものと考えられる。具体的な支援としては、児童生徒の言語理解の実態を適切に捉え、事象を表す「言葉」の提示が、視覚化なども含めて一人一人の実態に応じて適切に行われるとともに、「気持ちを表す言葉」も含めて新しい言葉との出会いも意図的に仕組んでいくことが重要であると考えた。

●「活動の共有」

児童生徒は授業の中で、様々に心を動かしながら学習に取り組んでいる。気持ちを表出できるようになることは、「思考力、判断力、表現力」を引き出す指導・支援においても重要なことである。「言葉の広がり」の支援」でも記述したが、目に見えない気持ちを「言葉」として受け止めたり伝えたりしていくことを学ぶ中で、気持ちと言葉をきちんとマッチングさせていくには、その時の児童生徒の気持ちを教師が読み取ることが必要である。また、必要に応じてリアルタイムで児童生徒の気持ちを「言葉」でフィードバックすることも大切になる。児童生徒の気持ちの読み取りにおいて、教師も活動を共有し、同じ気持ちを味わいながら発信を受け止めることは、共感をもって児童生徒を理解することにつながる。児童生徒にとっては、やりとりしている相手が自分の気持ちに共感していることを感じ取ることは、関わる相手や活動内容や場所への安心・信頼につながるものと考えられる。「安心・信頼」は、【「思考力、判断力、表現力」の育成を支える土台となる力】として、2年次のグループ研究を通して新たに付け加えることとした。

●「話し合い活動の工夫」

このポイントについては、2年次のグループ研究の「課題」として挙げられたものであり、ポイント図の作成段階では本校として有効な工夫点が明確になっているわけではない。今後、研究授業などの実践において、有効な方法を考えていかなければならない。ここでの「話し合い」は主には児童生徒間の意見交換の活動と設定した。自分とは違う考え方に会うことにより、「めあて」などの目的に照らして、よりよい考えを選択したり、自分の考えと相手の考えのよいところを合わせて、考えを発展させたりすることも狙った活動である。

●「振り返りの充実」

「振り返りの充実」は、「授業展開の工夫」の1つではあるが、本ポイント図では重要なポイントであるとし、別で起こすこととした。ここまでの、単元全体の展開でも授業展開でも「繰り返し」「発展」が有効であることを確認したが、その間には必ず、児童生徒による自分の取組の振り返りが必要であると考え。自分の取組を振り返り、その活動のよさを思い返したり、めあての達成を実感したりして達成感を味わうことは、「またやりたい」「もっとしよう」という児童生徒の意欲を引き出すことにつながる。また、「〇〇会の準備一本番」など本時の活動と次時の活動が必然的なつながりとあるものになっている授業については、「振り返り」によってつながりが整理され、次時への見通しや次時のめあての設定にもつながる。もし、本時においてめあてが達成されなかった場合においても、「失敗した」のではなくて「次は続きをしよう」「次回は〇〇しよう」という次回への期待や意欲になるのではないかと考えた。

「自分事としてのめあての設定」やこの「振り返りの充実」は、「思考力、判断力、表現力」を育む上で大切なプロセスだが、同じくポイントの1つである「活動時間の保障」との兼ね合いからどのように時間を確保していくかについては、課題として残った。児童生徒の物事の捉え方や受け止め方の実態に合わせて分かりやすく示す方法などを工夫していきたい。

●「児童生徒の内面を見取る評価」

「ねらいを明確にする目標設定」の特に「思考力、判断力、表現力」の目標設定や「児童生徒の内面を見取る評価規準の設定」において、物理的に目で見ることのできない児童生徒の内面をどのように引き出し、どのような行為や様子として見て取るかについて検討を行う。実際授業を行う中では、児童生徒に働き掛けながら、同時に評価を行っていくのだが、やはり目に見える行為や様子の背景にある「児童生徒の考えや思い」を丁寧に読み取ろうという意識が必要であると考え。目に見えないからこそ、必要に応じて「どう思いましたか」や「頑張ったところはどこですか」など、丁寧に児童生徒とやりとりしながら思いを探っていかなければならない。また、そこでも一教師の主観とならないように、教師間で共有・検討しながら評価を行うことが大切になると考えた。

●教師の聴く（観る）姿勢

児童生徒の実態把握においても、授業内での支援においても、最終的な授業評価においても、「思考力、判断力、表現力」という目に見えない児童生徒の内面への働き掛けは、すべてそこに「児童生徒は考えたり思いをもったりする主体である」という認識と、「一人一人の児童生徒の考えや思いを大切にしよう」という教師の基本姿勢がなければ成り立たない。授業においては、「児童生徒に正しい答を考えさせる」のではなく、「児童生徒がもっている思いや考えを引き出し、その思いや考えを深めたり広げたりすることを支援する」ことが求められる。その意味から研究の副題を－「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作り－と設定した。本ポイント図では、「教師の聴く（観る）姿勢」と記述した。

